

病虫害発生予報 第2号(5月予報)

和歌山県農作物病虫害防除所
TEL 0736(64)2300

< 予報の概要 >

作物名	病虫害名	発生量	作物名	病虫害名	発生量
水稲	もみ枯細菌病による苗腐敗症 ばか苗病 いもち病 ヒメトビウンカ 縞葉枯病 ツマク ^ロ ヨコハイ イネミス ^ソ ウムシ	並並並 やや少 やや少 並	カンキツ	かいよう病 そうか病 黒点病 灰色かび病 ミカンハダニ ヤノカイガラムシ チャノキイロアザミウマ	並並並 並並並
			タマネギ	灰色かび病 べと病 軟腐病	やや多 並
ウリ類	モザイク病 斑点細菌病	並 やや多	カキ	うどんこ病 円星落葉病 角斑落葉病 チャノキイロアザミウマ	やや少 やや少 やや少 並
野菜全般	アブラムシ類 ハダニ類 ミカンキイロアザミウマ	やや少 並 やや少	モモ	せん孔細菌病 カイガラムシ類	やや多 少
			果樹全般	カメムシ類	多

気象予報

1か月予報（予報期間 4月26日～5月25日 大阪管区气象台）

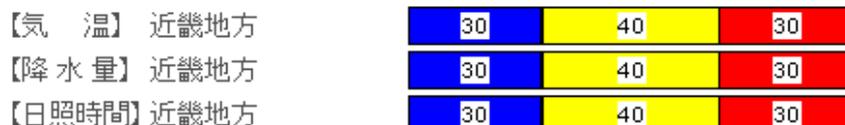
< 予想される向こう1か月の天候 >

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期で変わるでしょう。平年と同様に晴れの日が多い見込みです。

週別の気温は、1週目は、平年並の確率50%です。

< 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%） >



凡例: ■ 低い(少ない) ■ 平年並 ■ 高い(多い)

	月平均気温(平年値) (℃)	月降水量 (平年値) (mm)
5 月	和歌山 19.3	和歌山 150
	潮 岬 19.1	潮 岬 249

I. 水 稲

1. もみ枯細菌病による苗腐敗症

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 前年の県内全域におけるもみ枯細菌病の本ぼでの発生面積率は0%（平年4%）であった。

② 5月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 発病ほ場から採種した種子は使用しない。

2. ばか苗病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 前年の県内全域におけるばか苗病の本ぼでの発生面積率は0%（平年4%）であった。

② 種子消毒に用いる薬剤の効果は安定している。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 種子消毒を行う。

3. いもち病（苗いもち、葉いもち）

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 5月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 田植え時に育苗箱施薬剤を施用する。

4. ヒメトビウンカおよび縞葉枯病

(1) 予報内容 ヒメトビウンカ 発生時期 やや早 発生量 やや少
縞葉枯病 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 4月上旬の休閑田における20回振り搦り取りによる平均生息数は、紀の川市で1.3頭（平年7.6頭）、和歌山市で1.7頭（平年7.5頭）、かつらぎ町で2.3頭（平年4.7頭）であった。

② 越冬世代の50%成虫化時期は3月15～20日（平年3月21～25日）であった。

③ 和歌山市3地点およびかつらぎ町1地点におけるヒメトビウンカ（越冬世代）のイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率は、9.1～15.9%（前年10.0～18.0%）であった。

④ 県北部本ぼにおける前年のイネ縞葉枯病の発生面積率は11.8%（平年14.0%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① イネ苗へのヒメトビウンカの飛来を防ぐため、雑草地付近での育苗を避ける。

② 第1世代成虫は6月下旬に水田に飛来し、第2世代幼虫の発生最盛期は7月上旬と考えられることから、前年にイネ縞葉枯病の発生が認められた地域では、幼虫を対象にこの時期の追加防除を行う。

5. ツマグロヨコバイ

(1) 予報内容 発生時期 並 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 4月上旬の休閑田における20回振り搦り取りによる平均生息数は、紀の

川市で1.5頭（平成24頭）、和歌山市で2.7頭（平成46頭）、かつらぎ町で26頭（平成64頭）であった。

② 越冬世代の50%成虫化時期は3月26～31日（平成3月26～31日）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 田植え時に育苗箱施薬剤を施用する。

6. イネミズゾウムシ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 予察灯による4月1～25日の誘殺数は、那智勝浦町0頭（平成0.2頭）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 田植え時に育苗箱施薬剤を施用する。

② 5月中旬までに田植えする地域のうち、多発地ではさらに田植え3～4週後に薬剤を処理する。

II. 野 菜

<タマネギ>

1. 灰色かび病（白斑葉枯病）

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部での4月中旬の発生ほ場率は3%（平成0%）であった。

② 5月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① ほ場の排水を良くする。

② 罹病株や収穫後の残さはすみやかに処分する。

2. べと病

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 県北部での4月中旬の発生ほ場率は33%（平成22%）であった。

② 5月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① ほ場の排水を良くする。

② 罹病株はほ場から持ち出して処分する。

3. 軟腐病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 県北部での4月中旬の発生ほ場率は0%（平成0%）であった。

② 5月の気象予報による。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 降雨前後を重点に薬剤防除を行う。

<ウリ類>

1. モザイク病

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 施設栽培キュウリにおける4月下旬の発生ほ場率は県北部で0%（過去2か年平均3%）、県中部で0%（平成0%）であった。

- ② アブラムシ類の発生は平年よりやや少ないと予想される。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① アブラムシ類の防除を徹底する。

2. 斑点細菌病

- (1) 予報内容 発生量 やや多
- (2) 予報の根拠
 - ① 施設栽培キュウリにおける4月下旬の発病葉率は県北部で0%（過去2か年の平均2.8%）、県中部で7.3%（平年1.9%）であった。
 - ② 5月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 施設内の換気を良くして湿度低下を図る。
 - ② 薬剤防除は予防散布を重点に行う。

<野菜全般>

1. アブラムシ類

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
 - ① 和歌山市のキャベツにおける4月中旬の発生株率はモモアカアブラムシ5.0%（平年20.3%）、ニセダイコンアブラムシ0.5%（平年2.6%）であった。
 - ② 黄色水盤（紀の川市）の4月1～20日までの飛来数は、4頭（平年43頭）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 薬剤散布にあたっては葉裏に薬液が十分かかるように行う。

2. ハダニ類

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 那賀地域のイチゴにおける4月中旬のナミハダニは、発生ほ場率33%（平年18%）、寄生葉率5.6%（平年4.4%）、カンザワハダニは、発生ほ場率11%（平年33%）、寄生葉率7.8%（平年6.5%）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 露地栽培野菜等では、ほ場の周辺から侵入するので、外縁部の株において早期発見に努め、初期防除を行う。
 - ② 同一系統の薬剤を連用しない。

3. ミカンキイロアザミウマ

- (1) 予報内容 発生量 やや少
- (2) 予報の根拠
 - ① 那賀地域のイチゴにおける4月中旬の発生ほ場率は0%（平年発生ほ場率28%、1花当たりの寄生密度0.2頭）であった。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 発生密度の低い時期から薬剤防除を行う。

Ⅲ. 果 樹

<カンキツ>

1. かいよう病

- (1) 予報内容 春葉初発日 5月4～5半旬（並）
春葉発病量 並
- (2) 予報の根拠

- ① 県予察ほ場（無防除、有田川町奥）における越冬病斑量（前年の春葉における発病葉率）は14.7%（平年19.9%）であった。
- ② 5月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 薬害対策を講じた上で銅水和剤の予防散布を行う。
 - ② 罹病枝葉の剪除と防風垣の整備に努める。

2. そうか病

- (1) 予報内容 発生時期 並 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 前年8月中下旬の果実発病園率は3%（平年3%）であった。
 - ② 5月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 発芽直後の防除は効果が高い。常発園や前年多発園で、発芽直後に防除できなかった場合は早急に薬剤散布を行う。
 - ② その他の園では満開期に黒点病、灰色かび病を防除する際、そうか病にも登録のある薬剤を用いる。

3. 黒点病

- (1) 予報内容 発生量（初期感染） 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 5月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 樹上及び園内外に放置された枯枝を処分する。

4. 灰色かび病（開花期）

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 5月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 連年発生の多い園では、開花期～落弁期の天候に留意し、満開期に防除を行う。

5. ミカンハダニ

- (1) 予報内容 発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県予察ほ場（無防除、有田川町奥）における4月中旬の寄生葉率は0%で、マシン油乳剤を散布している慣行防除園における寄生葉率は0%であった。
 - ② 5月の気象予報による。
- (3) 防除上考慮すべき諸点
 - ① 冬期から春期にかけてマシン油乳剤を散布していない園では、97、98%マシン油乳剤200倍の散布を行う。

6. ヤノネカイガラムシ

- (1) 予報内容 発生時期 第1世代1令幼虫初発日 5月4半旬（並）
発生量 並
- (2) 予報の根拠
 - ① 県予察ほ場（無防除、有田川町奥）における越冬完了歩合、寄生量は平年並であった。
 - ② 第1世代1令幼虫初発日は、予察式 $Y = 57.03 - 0.109X$ により求めた。ただし、 $X = 3$ 、4月の日最高気温^{*1}（11℃超の各日の最高気温） $- 11℃$ の積算、 Y は5月1日を起点とした日数であり、 $Y = 15.6$ 日（予察ほ場の

樹上における実際の初発日の平年は17.8日)であった*2。

※1：予測式に使用した最高気温は、3月1日～4月17日まで本年の実測値を用い、4月18～30日は平年値を代用した。

※2：予測式および樹上における初発日の平年は2004年から2013年までの値を使用した。

7. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 黄色粘着トラップ(県予察ほ場：日高郡由良町)での4月26～30日の越冬成虫の誘殺数は、1頭(過去5年の平均1.0頭)であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① イヌマキやサンゴジュなど防風樹近くでの発生が多い。

<カ キ>

1. うどんこ病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 前年10月の「富有」の発病葉率は21.9%(平年34.3%)であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 子のう胞子飛散最盛期は4月下旬～5月上旬であり、この時期に水和硫黄剤を散布する。前年多発した園では、この時期の防除を徹底する。

② 4～5月に降水量が少なく、乾燥気味に経過すると発病が助長される。

③ 菌は葉裏の気孔から侵入するので、葉裏をねらって丁寧に散布することが大切である。

2. 円星落葉病、角斑落葉病

(1) 予報内容 発生量 やや少

(2) 予報の根拠

① 前年10月の「富有」における円星落葉病の発病葉率は0.5%(平年4.5%)、角斑落葉病の発病葉率は7.1%(平年23.5%)であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 円星落葉病の子のう胞子飛散は、5月下旬～7月中旬の降雨後に多くみられるので、マンゼブ水和剤、マンネブ水和剤、有機銅水和剤等を定期的に予防散布する。

3. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容 発生量 並

(2) 予報の根拠

① 黄色粘着トラップ(県予察ほ場：無防除、紀の川市粉河)での4月1～30日の誘殺数は、9頭(平年5.4頭)であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

① 落弁期を中心に防除する。

② イヌマキやサンゴジュなど防風樹近くでの発生が多い。

<モ モ>

1. せん孔細菌病

(1) 予報内容 発生量 やや多

(2) 予報の根拠

① 県北部の4月中旬の春型越冬病斑の発生園率は30%(平年5%)、発病枝率は1.3%(平年0.1%)であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 春型越冬病斑形成枝は葉への伝染源となるので、可能な範囲で剪除する。
- ② 果実発病は、5月以降の降雨により多くなるので、降雨前の予防散布を徹底する。予防散布ができなかった場合、降雨後できるだけ早く薬剤散布を行う。
- ③ 本病の防除薬剤のうち、マイコシールドは連用すると葉先の黄化を生じることがあるので注意する。

2. カイガラムシ類

(1) 予報内容 発生量 少

(2) 予報根拠

- ① 県北部の4月中旬のウメシロカイガラムシ、クワシロカイガラムシ雌成虫寄生枝の発生園率は10%（平成25%）、寄生枝率は0.1%（平成2.0%）であった。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 樹体生育期における防除適期は、第1世代のふ化幼虫発生時期であるため、ふ化幼虫発生ピーク時期の少し前に薬剤散布を実施する。
- ② 近年のふ化幼虫発生ピーク時期は、ウメシロカイガラムシが5月1～5日、クワシロカイガラムシが5月中旬であり、春先の気温で発生ピーク時期はやや変動する。
- ③ 休眠期のマシン油乳剤による防除は両種に対して有効である。

< 果樹全般 >

1. カメムシ類

(1) 予報内容 発生量 多

(2) 予報の根拠

- ① 落葉中におけるチャバネアオカメムシの越冬成虫数は、1地点落葉50リットル当たり2.1頭（前年0.1頭、平成0.3頭）であった。越冬成虫の捕獲地点率は51.1%（前年6.3%、平成16.0%）であった。
- ② みなべ町東本庄の予察灯での前年の成虫誘殺数は、チャバネアオカメムシが9月に24,262頭（前年755頭、過去3年平均2,843頭）、10月に7,293頭（前年0頭、過去3年平均31頭）、ツヤアオカメムシが9月に11,719頭（前年595頭、過去3年平均730頭）、10月に25,418頭（前年18頭、過去3年平均265頭）であった。
- ③ 県中部、県南部では越冬期に防風樹や中晩柑園において、ツヤアオカメムシが多く認められた。

(3) 防除上考慮すべき諸点

- ① 果樹カメムシ類の飛来量は園地間差が大きいので、園内での発生及び被害状況を観察し、防除は発生に応じて早めに行う。
- ② ウメの被害には品種間差が大きい。小梅類等の収穫の早い品種で集中して加害される傾向があるので、これらの品種では特に注意が必要である。カンキツでは蕾、花を加害するので、被害状況を観察して防除する。
- ③ 農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ内農作物病虫害防除所コーナーの果樹カメムシ情報や各地域のJA等の調査情報を参考にし、対応する。

本情報は、下記の方法でもご覧頂けます。

○農業環境・鳥獣害対策室ウェブページ <農作物病虫害防除所コーナー>

<http://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/070300/071400/boujyosyo-yosatsujyouhou.html>

○和歌山県ホームページ <わかやま県政ニュース>

<http://wave.pref.wakayama.lg.jp/news/kensei/>